

---

いぬたま

よしき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

いぬたま

### 【ZPDF】

Z9604B

### 【作者名】

よしあ

### 【あらすじ】

俺、相田良治。毎日何故か不幸です。神様の悪戯の所為で「犬男」にされてしまい…。俺のそんな毎日の話、聞きたい？

## 1・はじまり 犬男爆誕！（前書き）

初の書き下ろし連載です。  
無軌道でどこまで続くか分かりませんが、よろしくお願いします。

## 1・はじまり 犬男爆誕！

俺、相田良治（17才）は星に祈っていた。

高校男子のクセにそんな乙女チックでロマンチックな事をしている。

それには理由がある。

長年一緒に過ごした愛犬が、先日死んでしまったのだ。

たかが愛犬の事で、などと笑う事なかれ。

大事な、大事な家族だったのだ。

いわば、クレ ン shinちゃんのシロ、フランースの犬のパトラッシュ、ドラゴンールのクリリン。

な、どれもいなくなつたらみんなだつて悲しいだろ！

俺にどうてはそれほど大事な愛犬だったのだ。

愛犬の名前はカルディナ。

車の下で拾つた雑種だつたけど、そんな事は関係ない。

いなくなつて気が付く事もある。

カルディナは本当に大事な家族だったのだ。

だから真剣に祈っている。

「神様、お願いです。カルディナを蘇らせてくれ。…いやひと田舎うだけでも良い。頼む…。頼む！」

その時、星がキラリと光った。

原因は某大国の打ち上げた大陸弾道ミサイルがキラー衛星の攻撃により打ち落とされたのだが、ここは神様の奇跡に星が応えた、としておいてくれ。

世界のどこかで戦争をやっている事など関係ない。

今この話で大事なのはカルディナの事だからだ。

星の光に呼応するよつこ、夜空から一筋の光が射してくる。

驚いて顔をあげる。

「…ま、まさか…マジで…。」

光の中に着物姿の威厳ある姿が立っている。

バックには莊厳な音楽まで聞こえてきそうだ。

神様（らしき人）は静かに頷く。

「よろしい。そなたの願い聞き届けた。」

ありがたいお言葉に良治は手を合わせ涙した。

「つたく、男がメソメソしゃがつて、辛氣臭い野郎だな…。」

「…あれ？？さつきの威儀ある神様は…？？」

「ああ…、細かい事をウジウジと、五月蠅い奴だ。」

「い、いや…でも…。」

「さつきのも俺だよ。文句あるか？」

今、目の前にいるのは着物を着崩した粗暴そうな男が一人。

ダルそうに髪をかきあげながら欠伸までしている。

一言で言つと江戸時代の遊び人に悪そうなヤンキーを足した感じ。

とても神様の類には見えない…。

「で、願いだる。ここよ、叶えてやるから、がよひと待つてね。」

「……えつ……ええつ……？」

男が何事かブツブツ囁きながらお札を一枚差し出す。

「……の御靈を呼び覚ます……天青の名にて命じしる、心えよ  
カルティナ……！」

ポンッとお札が弾け、田の前に煙が漂う。

「ゲホッ……な、何を……。」

「さあ、お前の願いを叶えてやつたが。」

「まつ……？」

やつとの事で煙が消えた部屋の中を見回しても、カルティナの姿は見えやしない。

「ビ、ビ、ビ……みだる……。」

「はあ……よく見てみるつて。」

下を見下ろす。

なにやら後ろでパタパタとシッポを振る音が聞こえる。

後ろにいるのか？

が、振り返っても何もいない。

「じれつたいなあ……ほら。」

神様は鏡を差し出す。

見ると鏡の中の頭の上で耳がピコピコ。

お尻の部分ではシッポがパタパタ。

「うむ、良く似合っているな。」

神様（らしき人）はニヤッと笑う。

「なつ……なんじゃこりやあああ……！」

犬耳……それにシッポまで……。

お……俺、犬男になつちましたよ……！

## 1・はじめ 犬男爆誕！（後書き）

「いぬたま」のはじまりです。

携帯で見やすいように短めに書いていたのですが、どうやら短すぎたようです。

1話と2話を合体させました。

一度お読みになつた方にはお詫びを申し上げさせていただきます。

今後は「」のような事が無いよう気をつけます。

## 2・ヒバリ登場！

「何なんだよ！これは？！」

「だから、カルディナを蘇らせてやつたんだが……。」

「誰がゝ犬男くにしてくれつて言つた！――！」

「だつてお前カルディナを火葬しちまつただろ。」

「… そりだけど。」

「入れ物が無ければ蘇れないんだから、仕方なくお前の中に入れてみたんだが。」

「入れてみたんだが、つて…。」

「いや～、結構成功するもんだな。俺もビックリしたよ。」

ケラケラと笑つてやがる。

「戻せ！今すぐ元に戻してくれ。」

「無理。」

却下、といった具合に手をヒラヒラと振る。

「ちょっと待てよ、だいたい

「てんせこさまあ～～！！」

詰め寄りとした瞬間、甲高い女の声がそれを遮る。

「やつと見つけましたよー天青様！何寄り道してるんですかーー！」

「おお、ヒバリ。いや、ちょっと暇つぶしに…。」

「もう次の仕事の時間なんですよーまったく、すぐ仕事サボつてそういうやつてフラフラしてるから私が毎回苦労するハメに…。」

突然現われた小学生のような女の子は母親のようにブチブチと文句を言い始めるが、天青のほうはまったく気にしていない様子だ。

と、天青は何か閃いたように手を叩く。

天青は女の子へヒバリの肩に両手を乗せ顔を覗き込む。

「ヒバリ、大事な頼みがある。」

「…はあ、なんでしょうか…。」

ヒバリはなんとなく嫌そうな顔をして目をそらす。

「俺は次の仕事に行く。でだ、しばらくコイツの面倒見てやつてくれ。」

と俺を指差す。

「なに、しばらくの間だけだ。すぐに迎えに来る。それまで彼の傍

で色々と助けてやつてくれ。」「

「ちよつと、天青様？！」「

文句を言いかけたヒバリを無視して、俺にも一言。

「そのうちヒマが出来たら戻してやるからよ。それまでカルデイナと楽しく過ごせよ！」

天青は「アディオス」とか言いそうな感じで手を上げて空へ飛んでいってしまう。

「天青さまあ～！！」

ヒバリの叫びが虚しく夜空に響く。

俺はただ呆然とするしかなかつた。

もう、何がなんだか、だよ…。

犬男になつちまうわ、ヒバリは恋にすがりついてガツクリしてゐし。

と、突然ヒバリが握り締めた拳を突き上げる。

「…そりよ、発想の転換が大事なのよ…」

「…？？」「

「あのいい加減男の世話から解放された…いわば、これは私に『えられたバカنسスなのよ！ラツキーだと思わなきや！』

ヒバリは窓枠に足をかけ、それは見事なガツツポーズで頷く。

と、突然良治のほうへ向き直る。

「つて事でよろしくお願ひしますね。ちゃんとよろしくされぢやいましたから。」

と、ニッコ。

「お願いしますねつて…まさかここに住むわけじやないよな…？」

「ダメなんですか？」

ヒバリは、何言つちやつてんのこの人的な発言。

「いや、ダメも何も、いきなり家に転がり込まれても…。」

「じゃあ、私ここを出て行つてホームレスになれ、と？」

「いや…やうやうわナジヤ…。」

「ひどい！優しい人だと思っていたのに！こんな小さな女の子を追い出すなんて、鬼よ！悪魔だわ！！天青様の尻拭いとはいえ、困った事態になつた良治様の為に私…一所懸命頑張りつと…。」

叫ぶなりワーッと大声で泣き始めてしまう。

「ちよつ、待て待て！別に追い出そなんて全然…。」

「じゃ、ここに置いてくれるんですね。」

ガバッと顔を上げて詰め寄られる。

「……いや……それは……。」

涙溢れる顔で必死に助けを求める小さな女子……。

見捨てたら、やっぱ俺酷い人？

勢いに負けた良治は不承不承ながら小さく頷く。

「はい……どうぞ……。」

途端にヒバリの顔に満面の笑みがこぼれる。

「良かつたあ。お願ひしますね、良治様くはあとへ

可愛い笑顔に良治はちょっと照れてしまつ。

しかし良治は気が付いていないが、ヒバリの手には田舎が握られてたりする。

知らぬが仏。

ダメ神様の下で苦労してきたヒバリの処世術なのだ。

### 3・変態犬男

「ようするに、天青様は動物専門の神様で、私はそのお手伝いをしているんですよ。」

「はあ、動物専門…ねえ。」

「だから良治様みたいに人間相手に力を使えないはずなんですけど…。」

「つまり動物の医者に改造手術をされた、みたいなもんか？」

「ま、そんな感じですね。だから専門外なのでパツと直すわけにはいかないんですよ。あのダメ男の巻き添えを喰らつた良治様には災難かと思いますが。」

当然「思いますが」の後には「諦めて下さいね。」といつ言葉がくるのだが。

「で、直る見込みはあるのか？」

「…まあ？」

「さあ？じゃねーだろ！なんか方法が。」

「人間専門の神様なら出来ますけど、の人たちって…つまりエリートって奴？動物専門神なんて相手にしてくれないんですよ。だか

「う多分頼んでも無理かと……。」

「いや、でも天青はその「いち」治してやるとかなんとか…。」

「ああ、いつもでまかせですよ。見栄張りで言つただけです」

俺一生犬男のままかよ。

ヤハレ、シテ落込んでおた...

あ…でも奥様、安心なさいで下わし

おー、何か解決策でも…。

ヒバリは満面の笑みで、自身満々に語り放った。

良治様にとおおおこてもお似合いですよ」と、  
その旦とジッホ

「ちえー、残念。褒め殺しが通用しないなんて…。」

褒めてねえだろ！！

「ちなみに私は見習いなので、何の力もないし術も使えませんのであしからず。」

コノ役立たず。

俺はこの状況を親にどう説明するか悩んでいた。

正直に打ち明けるつてのもなあ…。

それ以上にほかの言い訳も思い付かないし。

と、凶む俺の後ろではヒバリが一人で遊んでいる。

いや。正確には俺の耳がピコピコ動くのが面白くて、シンシンしたりして俺で遊んでいる。

…まつたく…。

と、突然ドアが激しくノックされる。

そして耳とシッポを隠すひまなどない。ドアが勢いよく開けら

れてしまつ。

「おじやまー。良治、どつ? 元氣して…。」

侵入者の顔が見る見る変わつてゆく。

まるで…といつか、本物の変態を見つめゆづな冷たい視線。

入ってきたのは本田薫。

幼馴染で同級生で…その…なんてゆづか…アレだよアレ…

お、俺の好きなひと…うわあ、こいつ恥ずかしい。

長い黒髪、切れ長な目、細いくせに広げてゆくスタイルの良さ。

典型的日本美人タイプだ。

もう、こんな幼馴染最高だよなー。

ま、ぶつちやけ俺の片思いなのだが…。

…。

ちよつと待て…!

今の状況を整理してみよつ。

・落ち込んでいるであつて17歳の健全な男子高校生の部屋へ遊びに来た幼馴染の女の子。

・と、そこには犬耳＆シッポの「スプレ男。

・そして、それにじやれるよつて寄り添つ小学校低学年くらゐの幼女。

そこから導き出される答えとは…。

薫の顔が見る見る変わつてゆく。

まるで…といふか、本物の変態を見つめるよつた冷たい視線。

「な…何やつてんのよ?—」

やつぱり…。

「落ち込んでるんじやないかと思つて様子見に来てみたけど…。」

「あのや…薫、これには色々と詰が

薫は冷静な顔を作りながら、冷たく言い放つた。

「…変態コスプレロリペア男…」

「…ちよつ…待て待て!話くらい聞いてくれ!—」

背を向けた薫に追いすがるよつて手を伸ばす。

と、ほのかに爽やかな香りが鼻腔に届いた。

—ダイスキナ—オイ—

俺の中で誰かがそう言つた。

途端、俺の体は薫に向かつて突進していった。

「なつ……何やつてんのよ……」

「いや、俺の意思じや……ないんだが……」

俺の体は意思とは裏腹に薫にじりやれるよつて飛びついてしまったのだ。

「良治……止めて……あつ、変なとこ触らないで……」

「違う……体が勝手に……」

もつて俺の体は止まらなかつた。

犬のよつて薫の足や腰にすがりつき、嬉しそうにクンクンしてしまつう。

まったく俺の意思とは関係なく……。

……いや、ちよつと嬉しいハプニングとか思つたりして……。

突然。

バチーン!!

薰の張り手が思いつきり横つ面に入る。

「良治のバカ！……」

叫びながら飛び出していつてしまつた。

ヤバい……薰……泣いてたかも……。

俺はうなだれ、耳もシッポもシュンとなつてしまつ。

「わ、わあ～、修羅場ですね、修羅場…ドラマみたいです。」

無邪氣に笑つているチビッコ。

終わった……絶対嫌われた……。

ダメだ……もう立ち直れねえ……。

俺の人生……おわった……。

#### 4・新たな災難？

「あら、良治様。まだ泣いてるんですか？ じょうがない人ですね。」

ヒバリが腕組しながらヤレヤレと囁く。

片思いの幼馴染に痴漢行為（俺の意思に反しての行為だと強く訴えるが）を働いてキラわれ、その上で元気百倍な奴がいたらお皿にかかってみたいもんだ。

「まあ、まあ。仕方ないですよ。嬉しくてカルディナがちょっとはしゃいじやつただけじゃないですか。」

ポンポン、と俺の頭を撫でてニッコニコと笑う。

「ちょっとはしゃいだつて……。」

ちょっととさつきの動きを反芻してみる。

（俺（精神はカルディナ）、薫の体を触りまくり。

薫「良治のバカ！……」しかも涙目。

薫、逃げるよう走つて退場。）

まんま変態じやねえかよ！

「お触り大好き変態痴漢ボーイ」決定じゃないか！！

あーダメだ。マジ落ち込んできた。

ヒバリはまつ一回ヤレヤレと溜め息をつくと、思に出したよつて言  
う。

「やうやう、良治様のお母様にタゴハンだから呼んできて欲しいと  
言わされました。」

「…あ、やべ。タゴハンか…。」

「はい、冷めないうちに頂きましたよ。」

…。

「ちよっと待てーお前ウチの親と何話してんだよーー！」

ヒバリを居候わせる事をまだ何も言つてないのだ。

犬耳シッポ付きになつた上に、これ以上誤魔化しそうの無い出来事  
だつていうのに。

「何を？つて…」挨拶して、良治様の事をお話しして…。

「俺の事だと？」

「はー、随分可愛らしい姿になられましたよ、と。」

「言つたのか…。」

「はい。ありのままを。包み隠さず。」

ヒバリは、素直な正直者の私を褒めて下さい、みたいな顔をしています。

…。

これっぽっちも言い訳するひまも無く。

犬男になってしまい。

幼女と居候する事に。

変態コスプレロリペド男、なんて言葉が頭をよぎる。

ああ…もう家族にも見放されたかもしけねえ…。

さら下に落ち込む俺にヒバリはニッコリと微笑む。

「良治様、大丈夫ですよ。」

「大丈夫つて…なにが?」

「…ま、とにかく大丈夫ですから。」

怪しげな笑みを浮かべるヒバリの手招きに誘われて、仕方なく食卓へ向かつた。

「いや～そうですか～。神様も大変ですね～。」

「お父さん、お供え用のオハギをお出ししたほうが良いかしら?」

「おお、母さん気が利くね～。どうです? オハギはお嫌いですか?」

「とんでもない、大好物だよ。」

「アリヤ良かつたー母さん、早くお出ししてー。」

「はいはい。」

食卓の場はメチャメチャ明るかつた。

酔っ払って機嫌のいい父さんと、つらねて笑っている母さん。

父さんにビールを注いでもらっているのは天青だ。

「えつと…ビールを…？」

「天青様の術で、今回の出来事を納得してもらつてゐんです。」

ヒバリは得意げに説明する。

「ま、簡単な術ですし、元々この辺りの人は迷信深いので問題ないんですよ。」

「なるほどね…。」

肩の荷が下りてホッと溜め息をつく。

…いや、下りてない！

「この姿が一番の問題じゃないか！」

天青はそんな俺に気が付くとヒラヒラと手を振る。

「おお良治ー、ゴハン冷めちまつた。」

「いや、その前にーの姿をなんとか

「似合つてゐからいいじゃねえかよ。ねえお父さん？」

「まつたくもつてそうですね。折角神様がして下さつたんだ。ありがたいじゃないか。なあ、母さん？」

「ええ、そうよね。」

3人そろつて一ゴハンと褒め称える。

… ありがたくねえ、つつうのー！

天青は俺をチョイトイと呼び寄せる。

「なんだよ？」

「お前に良い物をやるよ。」

と小声で囁うと、小さな小壇を手渡す。

## 「元に戻る薬か？」

「いや。それより良い物だ。」

— 1 —

「惚れ薬。ま、お詫びのしるしだと黙りとが。」

何が買収されてるような気がするが……

いや、  
待てよ

コレを薰に使えば……うひひひひ……。

もしかして、もしかするかもしない！

「ヒバリには内緒だぞ。」

意味が分からんが、取り合ひのOKサインで答へとべ。

「ま、そんな訳でここの面倒頼んだぜ、良治ー。」

「わざか不本意とはいえ、色々と手を回してもりつてるんだ。

ヒバリの面倒くらになんとか…。

… じこつらへ？

テーブルを見回すとテーブルの向こう側でヒバリがから揚げと格闘している。

さらにその横に茶パツで髪の長い女の子がモソモソと「ハ」ンを食べている。

せりふ、せりにその横では手づかみで魚を食べている短髪赤毛の女の子までいるじゃないか。

「ちゅう…、ええ～～？！？」

「おひ、紹介しとくな。おいサラ。」

髪の長い女の子が顔を上げる。

見たところ14・5歳といったところだらうか。

キリッとした和服が良く似合つてゐる。

「あの、その節はお世話をになりました。サラで御座います。」

「その節??」

「お前が昔助けたんだよ。」

「おじいちゃん」として良治がキッネの子供を拾つてきた事があっただろ。」

その父の言葉に、ぼんやりと黙つて呟つてゐる。

「そつか。あの時のキッネか。」

「はー。見習として召し上げられる前に、良治様に御礼を申し上げたいと天青様にお願いしました。」

サラは深々と頭を下げる。

俺も何となくつられて頭を下げてしまつ。

凄くおじとやかで礼儀正しきじゃないか。

「さて、でもう一人がアイだ。」

呼ばれた赤毛の女の子は口から魚の尻尾を垂らしながら振り返る。

見た目はビバリと同じくらいの10才前後のチビッコなのだが。

食べ方、動き、存在、全てに「野性的な」と前置きしてもこゝへりの溢れ出るヤンチャっぷりが見て取れる。

「アイ、良治だぞ。」

天青が俺を指す。

「…良治…なのか？本当に良治なのか？」

「そ、そうだけど…。」

「良治、会いたかった！！」

突然跳躍したアイはテーブルを飛び越えて俺に突撃してきた。

「うわっ！…な、なんだ！？おいつ…！」

「アイもな、お前が助けたサルなんだ。」

「そりそり、あれは良治が10才の頃だったかね、母さん？」

「あら9才の時ですよ。泣きながら、可哀相だ、って怪我をしたお猿さんをつれて帰ってきて。」

「そりそり、9才か。あの時は大変だつたなあ。」

「お前、色々と助けすぎだる。」

天青が笑う。

アイをなんとか引き剥がし、天青を睨む。

「ほつとけ…。」

「ま、やつやつの好きだぜ、俺は。」

「「うぬせえよ。」

「で、だ。2人とも俺のところに見習をする予定だったんだが。ま、俺も色々と忙しくてな。暫く預かってくれな。」

「ちよつと、勝手に決めるな」

「そりゃ もう、神様にお願いされたとあつては断れないですね。いいな、良治！ しつかり面倒見るんだぞ！」

母さんも、ウンウンと頷く。

両親の中ではもう決定事項になつていいようだ。

…「コレも術で元に戻しかしてるんじゃねえだらうな？」

「そり、そんじや俺はこれで失礼するぜ。」

「ちよつと、元にもどる」

「そのうち何とかしてやるよ。んじやなー。」

天青は爽やかな笑みを残してポワーンと消えた。

そのうち…ね。

その前に、だ。

よほど氣に入ったのか、まだから揚げを食べ続けているヒバリ。

目が合つと照れくさそうに頬を染めるサラ。

何故か俺の左腕にぶら下がっているアヘ。

娘が出来たみたいだ、とはしゃぐ両親。

なんか問題を押し付けられただけのよつた氣がするのだが…。

惚れ薬で買収されたのは、ちよつと早かったかな？

#### 4・新たな災難？（後書き）

勢いでキャラが増えました。

後悔してないし、反省もしてない（笑）  
ノンビリ更新ですが見捨てないでね（^\_^;）

ヒバリ

自分で「バカنس」と言ったのは上手い言い方だと思った。

あのいい加減男の面倒を見なくとも良いのだ。

最高じゃないですか！

知るほどに良治様の人柄も優しくて、何とかやってゆけそうだし。

後から入ってきた2人ともなんとかなるだろ？

むしろ、後輩として色々とやつてもらおうかな？

などと考えて、ヒバリはホクホクした笑顔を浮かべる。

でもね…本当は…。

そう、本当は何処かの山の主様の所にでも奉公に行きたかったのだ。

お庭の手入れ役や厨房でも構わない。

安定した職場で、静かに自分の仕事に専念し、昇進を目指す。

そしてゆくゆくはどこかの主様に見初められたら…なんて考えてた事もあったのだ。

それが今では、転勤、連戦、出張続きの動物霊の神様のお世話係り。

確かに爬虫類霊専門や九十九神専門よりはマシだといえる。

でもね、仕える相手が天青様でなければ話だつたのだ。

スケジュールは守らない、遅刻間違え当たり前。

仕事も適当で、たまにサボつて何処かで遊んでいるほつが多いくらいだ。

一度、某山の主様が怒鳴り込んできた事があった。

女房に手出しそるなと言われ、何故か私が謝り倒したのだ。

もうああぬうのは勘弁して欲しい…。

本当にいい加減な神様。

でも、だからこそ、このバカנסを楽しむねば、と思つ。

ああ、いつそ良治様が治らないですとこのままなら最高なんだけどな…。

そんな腹黒い事を考えてたりする。

ヒバリなりの処世術なんですよ。

アイ

良治はいい！

良治はやつぱり、あつたかい。

やつぱりの抱きついた感触を思い出しながら口にしてしまつ。

今までにあつた色々な事を全て忘れさせてくれた。

繩張り争いでどうちゃんが死んだ事も。

新しいボスにかあちゃんが追い出された事も。

自分が死んでしまった事も。

全部、そんな事もあつた、といつ氣にせしてくれる。

そうだ、今だ。

今が大事だと思っている。

良治がいて、アイがいる。

それが純粋に嬉しかった。

それに友達も出来た。

まだ話はしないけど、きっと友達になれる。

良治がいるなら、なんでもできる。

なんでも楽しい。

「アイちゃん、お風呂入りませんか？」

ヒバリが微笑みながら話しつけてきた。

「お…ふろ？」

「あー、つまり体を綺麗にして

「ああ、おんせんか？アイしつてるぞ。」

「ちよっと…違つけど。井、いいか。一緒に行こうよ。」

アイは大きく頷く。

ヒバリは良い奴だ。

親切で、大好きになつたぞ。

「おんせんはお湯に入るんだぞ。」

「うん、お風呂も一緒に、服を脱いでお湯に入つて、体を綺麗にするところだ。ちよつ！……」

「ん？ どうした？」

「まだ、服脱いじゃ」

「あつ！ 良治だ！……」

大好きな氣持ちは止められない。

アイは上着を放り投げ、平坦な胸を晒しながら良治に突撃した。

サラ

落ち着いて、落ち着いて……。

大丈夫、落ち着けばきっと。

根拠の無い自信が虚しく感じられる。

わつわはちやんと言えなかつた。

良治様に助けて頃いた事。

そして、いつしてまたお会いできて嬉しかつたと。

嗚呼、良治様の顔を、言葉を交わす事を、考えただけで倒れてしまいそう…。

胸がドキドキしていた。

頬がカツと熱くなつて、何も言えなくなつてしまつた。

それにも。

久し振りに出会えた良治様の顔を思い出す。

やはり素敵なおです…。

子供の頃、あの腕にギュッとされた時から密かに思つていた。

見習として人の姿を『えられた所為でしうか？

あの時よつも、もつと優しくて素敵なおだと感じられる。

胸がドキドキして壊れてしまつた…。

落ち着いて、私。

そつ念じる。

良治様のお母様に頼まれてお風呂場に服を持ってゆくだけ。

服を置いて、一聲かければそれで良い。

もしも時間が許すのならば、さつき詮々なかつた言葉もお伝えしたい。

それで、お話しをする事ができるのならば以上はもつ…。

それ以上をチラッと考えて、また顔が火照つてくる。

ダメダメ！

ただ、着替えをお渡しするだけなんだから。

落ち着いて。

落ち着いて私…。

と、ドアノブに手を掛けようとしたところ、いきなりそれは開いた。

「母さん、着替えが

「やつ…」

上半身裸の良治様に抱きとめられた形になってしまった。

破裂したドキドキで、サラは一瞬でのせてしまつた。

薰

わつかぬかよつと聞こ過ぎたかな…。

大体、いきなり触りまくるなんて無しでしょー。

い、いや別に了解を取れば良いとか、そつぬりさんじやなくてー！  
ああ、その、つまり、少しばかし訳を聞いてあげないのも可哀相か  
なつて。

なこやらおかしな事を言つてたよつな気もするし。

そつぬりえればあの娘誰だらう？

妹はいないし、親戚の子とかかなあ？

まあ、べ、別に誰でも良こなじやなーし…。

第一に今は別にあいつに会いに行くわけじやないしー。

おばさんのがキンピラくれるつて言つから行うだけで。

おばさんのキンピラ好きだから行くだけ！

もしもね、もしもたまたまあいつに会つたなら話の一つでも聞いてあげても良いかなとかは思つてゐるよ。

そんなのはオマケで、ビーでも良いナビ。

「スプレーじようが、少女と戯れ様が別に私には関係ない……。

そういえば何でコスプレしてたんだろう？！

アキバ系とかソッチが趣味とか？！

あーやだやだ……。

つて何考えてるんだ？！、私。

はあ……。

もう、サツと行ってキンピラ賣つて、そのまま帰つちやえれば良いんだ。

言いたい事あるなら、そのつあつちかられてくんでしょ。

うん、そうだ。

さて、勝手知つたる馴染みの家だ。

とつとと用を済ませよ。

良治

それにしても。

今日は次から次から色々な事が…。

「はああ…。」

ドツと深い溜め息が出てしまう。

耳とシッポは変わらず存在感を示すようにフルフルいってい。

ヒバリだけでなく、サラとアイの面倒も見なければならない羽田に。

びりして次から次へと…。

… でも。

と思い直す。

その報酬で惚れ薬、つてのは結構オイシイかもしけん！

薫に使つて効果が現われれば、「良治好きスキッ！！」なうんておいしい事も。

うん、在り得るわけだ。ぐふふ。

うひやーたまんねえー！ー！

どうするよーおーー？

もしかしたら、とか な事まで。

あ～ヤバ、想像しただけで鼻血出そー。

つてか、出てもーた。

いかん、いかん。

バカな妄想はいい加減にして、どうやって薫に惚れ薬を飲ませるかを考えねば。

つと、着替え持つてくんの忘れてるし。

バスタオルを腰に巻いてドアを開ける。

「母さん、着替えが」

「 もやつー。」

勢いよく何かとじぶつかつた。

慌ててみるとサラが真っ赤な顔をして立っている。

と、次の瞬間サラがカクンと崩れ落ちた。

「 わーたつたたた！」

咄嗟に両腕で抱えるが、予想外な重さで一緒になって崩れ落ちてしまつ。

と、そこに突撃してくる赤い弾丸が。

「 つょーじーーーーー！」

「 あらら、アイちゃん？……つー、サラちやんじたんですか？  
？！？」

半裸で背中に抱きつくアイ。

押し倒されたサラを見てジックリしているヒバリ。

鼻血を出しながら、バスタオル一丁でサラを押し倒している良治。

そして、お約束のようにキンピラを持って台所から出て来た薫。

「 な……なに……。」

「か、薰！？」

「氣まずい沈黙の後。

ハラリ…。

運悪くも、腰に巻いていたバスタオルが落ちてしまった。

そりやもひ、モロ見え。

「良治のバカアアアアアー！！！！！」

バチィインー！

強烈な一撃を残して薰は走り去ってしまう。

混乱してゐるヒバリと、はしゃぐアイ、グッタリしたままのサラ。

自失呆然と涙を流す良治。

…もうダメだ…。

マジで、立ち直れない…。

あつ、ヒバリが声をあげる。

なんだよ、慰めの言葉でもひつのか？

「やつこえば今日2回目の修羅場ですよ、良治様！凄いですね～。」

...「マイツ二つか殺す...」。

## 5・もう一騒動（後書き）

微妙に微妙な方向に行つてゐるよつな（へへー）  
まあ、良治は変態つてことで話は進めようと思つてますが（笑）  
ちなみに物語内ではここまで4時間くらいしか時間が経過してません。  
どんだけ長い話になるんだ、こりや…。  
ま、ノンビリ、ダラダラ連載ですが、引き続きよろしくです。

ピピピピピピピピ。

けたたましい目覚ましの音に仕方なく目を開ける。

やわらかな朝の光の中、ボーッとしたまま部屋を眺めた。  
ベッド脇にひいてある布団は乱れたままその主を失つたままだ。  
そして元々片付いていない部屋が、より一層その乱雑さを増していく。

そーいえば、なんか…昨日色々あったような…。

なんか…思い出したくないような事が…。

と、体に感じる妙な感触に視線を自分に戻す。

右横に女の子、胸元にキッネ、左腕にはサルがしがみついている。

「おわっ！」

一瞬、何事かと慌てて飛び起きる。

キッネは口口口口と部屋を転がつていった。

「あふ…おはよひひやれこまく…。」

右横に潜り込んでいた女の子、ヒバリは大あくびをしながら口を擦つている。

左腕のアイは何事も無かつたように、しがみついたまま寝息を立てる。

…ああ、そうだ…。

昨日から神様のところ下り端3人が同居する事になつたんだ。  
うう…思い出したくもなかつたのに。

それで物置部屋が片付いてなくて、居候どもが俺の部屋に転がり込んできてたんだった。

部屋が狭いので、3人で2つの布団つてのは可哀相だつたかと思つたりもしたが。

つつうか、布団ひいてやつたのに何で俺のベットに入り込んでるんだよ。

「いやー、ベッドつて寝やすくて良いですねー。」

貴重なご感想ありがとう、ヒバリ。

キツネがクルンと宙返りをすると、ポンと人の姿になる。

「お、おはよひしゃいます、良治様。」

顔を赤くしたサラが深々と頭を下げ挨拶する。

うんうん、礼儀正しい子だ。

で、何で顔が赤いんだ？

「あつ、あの、私朝食のお手伝いをしてきます。。。」

パタパタと急ぎ足で走り去つてしまつ。

それを見ていたヒバリがニヤリと笑う。

「良治様、何やらかしたんですか？」

「するか！あほ。」

「薰様に振られて欲求不満とか？」

「。。。」

「いつ絞め殺したろか…。

普通の女の子ならともかく、寝たりして気が抜けると動物に戻つて

しまう女の子に對して何をしろと言つんだ。

しかも幼女に！

修行をすればヒバリのように人の姿のままでいられるらしいのだが、最近見習いになつたばかりのサラとアイには難しいようだ。なんだか、神様の世話係見習いつてのも色々とあるんだな。

「ん？…あれ？」

「どうしました？」

「いや、着替えたいんだがアイが俺の腕を放してくれなくて…。」

「どれどれ。」

いつまでもぶら下がつているアイの小さな手を引き剥がそうとしているのだが、強烈な握力でなかなかその手が離れてくれない。ヒバリも手を貸してくれてはいるのだがこれがなかなか…。と、突然腕を握る力が強くなる。

「いたたつ！アイ結構力あるぞ。」

「そういえば、サルだかチンパンジーだかは握力が200キロぐら  
いあるとか…。」

「腕が干切れるわい！」

「大変！アイちゃん！目をさまして！」

「あだだだだつ…！折れるつつ…！…早くなんとか…。」

「アイちゃん！アイちゃん…！」

「んぎや～～…！…おれ…る…！…！」

「『メソ...良治...』」

俺とヒバリに怒られたアイはシュンとなつている。  
ま、でも悪氣があつてしたわけじゃないしな。

「あ...あ...次は寝ぼけなこつひ。」

頭をクシュクシュと撫でてやると、ニバツと笑つ。  
なんか犬みたいで可愛いで。  
サルだけどな。

「良治様、そろそろお時間では...。」

遠慮がちにサラが言つ。  
この子はどうも遠慮がち、といつか怖がつてゐるよつて見える。  
まあ、昨日半裸で抱きつこつてしまつた前科もあるしな...。  
もつひよつと優しく対応してあげなきやならぬのかな?  
出来るだけ笑顔を作りながら答える。

「ありがとう、サラ。」

「や、そそ...そんな、とんでもないです。」

あー、こつやむつくり慣れてもらつしかないのかな...。

「や、良治様。とつとと学校行きますよ。」

と、ヒバリ。

コイツは慣れすぎだ。

ヒバリは2人に先輩っぽく言い聞かせる。

「じゃ、私達が学校へ行っている間、お母様の言ひ事をよく聞いて大人しくしてくださいね。」

「そうそう、俺達が…って…何でヒバリまで学校に行こうとしてるんだよ…。」

「ヒバリちゃん…お母様、だなんて水臭い。本当のお母さんだと思つても良いのよ。」

「ああ、もう…混乱するから母さんは黙つて…。」

母さんは涙目で向やうへ訴えてくるが、ほっておく事にした。

「でも私、良治様のお世話をしないこと…。」

「お世話ならアイもしたいぞ…。」

「あっ、わ、わ、私も…。」

「世話なんかいらねえ…。第一にみんなは生徒じゃないから学校に行けないって。」

「んじゃ、変化して行けば」

「どこの世界に学校に動物連れて登校する奴がいるんだよ。」

「でも…。」

「でもじゃない…世話なんか必要ないから。」

ヒバリが俺の頭の上を指差す。

「でも、耳とシッポが。」

「…。」

…。

わすれてたあああ…。」

朝からドタバタしてたからすっかり忘れてた。

よく考えたらこんな格好で学校いけないじゃん！

「ヒバリ、昨日の術みたいにみんなに納得してもらえないのか？」

「いや…私達の力じやまだそこまでは。」

「誤魔化せないんじや休むしか…。」

するとヒバリがポンと手を叩く。

「良治様、私に良い案が。」

いや、そのニヤツと笑うの怖いんだけど…。  
仕方ない、聞くだけ聞いてやるか。

「オツスー！良治。」

肩をポンと叩いたのは沢井遊。<sup>さわいゆう</sup>

良く言つても、悪く言つても悪友としか言ひようがない奴だ。

「ん、おはよつ。」

「ちょっと、聞いてくれよ。さつきが、電車が揺れた時に女の子に抱き付かれちゃってや。それがメチャメチャ可愛いんだよー！これつて口マンの始まりじゃね？トキメキメモリアルつて感じじゃね？」

青春ストライクで、俺始まつたんじゃね？ビツよ・ビツよ・

「…。」

「なんだよ、つめてえなあ～。」のつ、」のあ・」

とか俺のわき腹をグリグリしていく。

ま、こんな感じで頭が腐つてる奴だ。

まともに相手してたら俺の精神状態まで疑われてしまいそうだ。

「良治様、バレてないですよ。作戦バッヂリです。」

「…」についてはバカだ。参考にならん。」

ヒバリは小鳥の姿で俺の肩に止まっている。

コレも異常な姿だと思うのだが、教室についても誰も突っ込まない。みんなが遊と同じくバカなのか、俺がアレだと思われているのか…。知りたいけど、怖くて知りたくない…。

「おつと良治君、独り言ですか？それとも僕に言いたい事でもあるんですか？さあ君のその熱いパッションをぶつけたまえ！君のリビードーを迸らせたまえ！」

とか言いながらポーズを決めている。

誰か、マジでこいつを何とかして下さい。

しつかし…。

クラスにほとんどの人間が入ってきているにも関わらず、誰にもバレてないみたいだ。

まさかこんな作戦が上手くゆくとは…。

ちなみに作戦というのは。

・頭にニット帽かぶる。

・シッポはケツが膨らまないよう股間に挟む。

・以上！

いや、コレを作戦と呼んでいいのだろうか。  
なんか時間の問題のよくな気が。

「...おせち」

その声にピクッと体が反応する。

道林集日本方整林日本一  
卷六

「……お、おやめいり。」薰ちゃんの、おやめいり。

一瞬昨日の事が頭を過ぎり、気まずいムードが流れる。

必死に言ひ訛を考へていると ノガの横槍が

「あやあ～、何ですかこのKJK版は。何やり怪しい匂いがしますよ～。青春しちゃつたんですか？熱いパトスを送りちゃつたんですか？」アチチでパヤパヤですかあ？」

גַּם־בְּאַתְּרֵי־

バキッ！

俺と薰の強烈な一撃を喰らつて、遊は撃沈する。  
そんな事よりも昨日の誤解を解かないと。

「薰！後で…その、話があるから。」「つ！」「う、うん。」

よつしゃあ！なんとかなるかも—  
ちょっと希望の光が見えてきた。

あとは完璧に誤解を解いてだ、それから……。

「な、な、な、な、なに…？」

薰が俺を指差して、顔を赤くする。  
ん？なんだ？？

指されているのは俺の股間の辺りだ。  
見ると喜んだ尻尾がワサワサ動いている。  
見た目には股間がモリモリ動いていた。

「なつ！？！？」

「りょ……良治の変態いいつつ…！…！」

バチーン！…！

崩れ落ちながら思つた。

「…やつぱつこひゆつ運命なのか、俺？」

昼休み、俺は屋上に避難していた。

もつ、今までの事は思い出したくない…。

朝の事がすでに学校中の噂になつてゐるのだ。

A子「ねえ、聞いた？相田君の話し。」

B子「知つてる知つてる！なんか凄いんだって！」

C子「何？何？」

A子「3組の相田君のアソコが動いたんだって！」

B子「ズボンの上から分かるくらい！！」

A子「しかも、こうビクンビクンって！」

C子「ヤダー！それって…それって！！」

B子「それを朝からクラスの女子に見せつけたらしくて。」

C子「イヤー！！変態！！」

A子「しかもそのアソコが で みたいで、変な液が出て

しちゃつたんだって！！」

C子「ヤダー！！あたし、もつ男の子に触りたくない。 され  
ちゃう〜！」

つてそれ、せめて俺の聞こえない所で言つてくれよ…。

もう学校来れない…。

つてかやつぱ来るんじゃ なかつた。

クソ！青春の夢さに涙が止まりやしねえよ…。

さめざめとないでいると、傍らでポンとヒバリが変化する。

「あらら、また泣いているんですか？良治様。」

「何が良い案だ、この野郎！」

「ま、仕方ないじゃないですか。」

「仕方なくねえだろ！俺もう学校来れねえよ…」

「ううん、じゃあ仕方ないですな。もつ少し良治様で遊んでみたか

つたんですが。」

「俺で遊ぶな！！」

「最後の手を使いましょう。」

「最後の手？」

「はい。日本人の好きなお涙頂戴モノでこきます。」

なんかまた、自身満々のヒバリに一抹の不安を覚えた。

俺はヒバリに説得されクラスに戻った。

ヒソヒソ声が背中に刺さる。

針のむしろだ…。

席についても誰も話し掛けようともしない。

というか、珍獣を見つめるように遠巻きの見物人が増殖していく。  
クソ！早く来てくれヒバリ。

「話は聞かせてもらつたぜ、良治。お前のアレがナニしちやつてる  
んだてな。うひやひやひやひやつ！」

ゴツッ。

唯一話し掛けてきた遊を右の裏拳で沈黙させる。  
まったく、どいつもこいつも…。

「…良治。」

「えーん、えーん！」

入り口からヒバリを連れた薫が現われる。  
ヒバリは大泣きしながら薫にてを引かれている。

「「」の子、良治の親戚の子なんだって？」

「えつ？！そ、それは…。」

「お兄ちゃん…！」

俺の台詞を遮るよつて「」が飛びついてくる。

「私に合わせて演技してくださいよ。」

「あ、スマン…。」

ヒソヒソ声で打ち合わせをしながら、なんとか演技に戻る。

「ど、どひしたんだ？遠い親戚の「」。お、お兄ちゃんの学校に来ちゃダメだつて言つただろ。」

「だつてヒバリ寂しかつたんだもん！」

「ああ、ゴメン、ゴメン。お兄ちゃんが悪かつたよ。」

「良治、「」の子…親戚の子だつたんだ？」

「あ、ああ。母さんの伯父さんの娘の腹違いの弟の妹の…つまり遠い親戚で、つい最近両親を亡くしたからウチで預かる事になつて。」

「そつ、そつだつたんだ。」

「うん、ううう…してつ。」

「台詞が棒読みすぎです！」

小さな声で怒りながらヒバリが俺のスネを蹴る。  
俺にこんな演技力を求めるなよ。

「お兄ちゃん！ナーテナーテさせて。」

「ま、またかい？ししし、仕方ないなあ。」

俺はしゃがむと一軒を取る。  
とチヨコノと耳が現われる。

「うふふ、カルディナだ。」

「まったく、ヒバリはウチの愛犬だったカルディナが好きだな。」

「良治その耳つて？」

「カルディナが死んじゃって寂しかったからお兄ちゃんにカルディナになつてもらつたの。」

「まったくまいったよ。シッポまで付けられちゃつて。ヒバリちゃんは本当にカルディナを好きだつたからな。」

ズボンをずらすとシッポがチョロンと出でくる。

ヒバリはそれもナデナデしてくれる。

「でもねヒバリちゃん。」のシッポの所為でお兄ちゃん困つてるんだ

だ。」

「どうしたの？」

「お兄ちゃん変態さんと間違えられちゃつて……。」

「私も良治がコスプレにでも走つたのかと。」

器用にもヒバリは涙を溢れる寸前で止めながら、立ち上がり大きな声で訴える。

「みんな酷いよ。お兄ちゃんはヒバリが寂しくない為に一生懸命やつてくれたのに。お兄ちゃんは変態じゃないもん！とつても優しいだけなんだもん！！」

「…。」

ヒバリの迫真の演技に皆はシウンとなる。

なるほど、これがお涙頂戴作戦か。すると薫が近づきヒバリを撫でてやる。

「『メンねヒバリちゃん。私、良治の事誤解してたね。ヒバリちゃんの為に頑張つてただけだつたんだね。』」

「お姉ちゃん…。」

よつしや。いい具合に薫の誤解が解けてる。

このままクラスマートも巻き込めれば…。

と突然、遊が俺に抱きついてくる。

「良治よーーお前を真性の変態だと思つてしまつた俺を許してくれ！前々から怪しいと思つて、素直に納得してしまつた俺の心の方が汚れていたよー！」

いや、抱きついて泣くこたあねえだろ。  
つか、お前俺をそんな風に思つてたのかよ…。  
うわあ、鼻水汚いつての！

「みんな、良治はヒバリちゃんの為にコスプレしてたんだ。皆も誤解を解いて良治のコスプレを応援してやるひー！ヒバリちゃんの為にさー！」

「おおーーー！」

遊の一言に妙な団結が生まれる。

コスプレ応援してもらつても嬉しくないのだが…。

ガラガラ。

開かれた扉の向こうには涙を流しながら立つている校長先生が何故かいた。

「話は聞かせてもらいました。健気な少女の為に友達に笑われてもコスプレし続けるその勇気。そしてそれを守るつとする皆の思いやり。私は感動の涙を止める事が出来ません！今回の件は校則違反に

はしません。さあ、相田君。どんどんコスプレして下さい……」「

「さすが校長話が分かる！みんな聞いたか！これで良治は学校公認のコスプレイヤーだ！俺達も頑張って応援してやるぜ……」

「おおーっ……」

クラス全員が口を突き上げ叫んだ。

何だ？この団結は？

ま、まあこの姿を何とか誤魔化せたから良いのだけど……なんか嬉しくないなあ。

…。

つか、俺、学校公認のコスプレ大男ですか…。

嗚呼、普通の生活がドンドン遠のいてゆくよつた。

ヒバリはコツソリとブイサインをしている。

そのヒバリを、良かつたね、と言いながら薫が撫でていた。ま、コイツのおかげで薫と仲直り出来たし。悪くないかな、ひつひつの。

ご無沙汰です。

今回は良治君が学校で変態です。

まあ、彼の不幸は今に始まった事じゃないですか。

にしても、自分で書いておいてなんですが、良治とヒバリは結構良いコンビだなあ、と。

会話がポンポン出てきて大変楽です（笑）

ただ個人的にはサラが気に入っているので、掘り下げて書いてみたいなあ、とか思っています。

ま、ストーリー的には始まつたばかりなので、追々ゆっくりと書いてみたいですね。

次回までまた少し間が空くと思いますが、見捨てないでね（＾＾・）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9604b/>

---

いぬたま

2010年11月30日03時47分発行